ただ悲しくやり切れない

校　長　　武井　正明

巨人の野球に関心が薄くなったのは、高橋由伸が監督だった頃からだ。
由伸が慶応大から入ったキャンプはワクワクした。鹿児島のオープン戦でライトから矢のような球で走者を刺した。開幕戦、神宮の試合を見ようと準備していたら、ついコップの水をテレビに零してしまいテレビが点かなくなった。溜まらず近所のホームセンターに走って小型テレビを買ってまで由伸を見た。走攻守三拍子揃った躍動感の塊。こんなに楽しそうに野球をする選手を久しぶりに見た。
なのに…。監督になった途端、彼の顔から楽しさが、笑顔が消えた。試合後のインタビューは淡々としたコメントの繰り返し。栄誉ある巨人軍の監督なのに、やりたくなさそうに、つまらなそうに私の眼には映った。
この頃からだ。巨人の試合に急激に関心がなくなったのは…。

由伸の後で入ってきたのが阿部慎之助だった。
中央大からホームランを打てる捕手として、鳴り物入りで巨人軍に入団した。
入団するとすぐ頭角を現した。愛されキャラで、ヒーローインタビューでは「最高でーす!!」がお約束となり、東京ドームに響き渡っていた。主将としてもチームを牽引し、日本を代表する選手となり、首脳陣や選手から絶大な信頼を得て輝いていた。

監督となり特に昨年からの慎之助の眼には、由伸の時の眼と同じものを感じた。
何のために闘っているのか。何を守るために必死で頑張っているのか。選手に愛はあるのか。かつては堀内恒夫も酷評された。巨人軍監督とはそれほどまでの重圧なのか。

その阿部慎之助が監督を辞任することになった。
あんなに悲しくやりきれない記者会見はなかった。憔悴しきった慎之助を見るのは切なかった。大の巨人ファンだった親父もきっと天国で泣いてるに違いない。

真実はわからなくていい。ただこれは言える。
阿部親子お互いにとって、家庭が心安らぐ空間ではなかった、ということだ。
どんなにきれいで大きな家も、何不自由なくモノで満たされている家も、そこで生活している家族同士が、思いやりや愛情で支え合っていなければ、そこには何の幸せもない。その逆も然りだ。足りないものを分け合う家族は笑顔と愛で満たされている。

会見で阿部慎之助は、迷惑を掛けた球団や球界、ファンに涙ながら謝罪していた。
しかし私は、最も詫びなければならないのはそこではないと思う。
こうやって見ていると、やっぱり慎之助が不憫でならない。
慎之助…なんでこんなことになってしまったんだ…。　　（敬称略）